

山西省と埼玉県は似ているかも？

皆様お久しぶりです、大瀧東生です。前回のレポートから既に1か月が経過していることが信じられませんが、今回は2か月目に突入した授業の感想や、現地大学生との交流についてご紹介したいと思います。

10月は、授業で覚えることが飛躍的に増えた月でした。読解や会話のクラスをはじめとして、新しい単語や構文が次々と登場し、それらを覚えるのに日々必死です。定期的に新出単語の听写（ディクテーション。听は「聞く」、写は「書く」）があり、音・漢字・意味の3つを一致させることの重要性を改めて認識しました。「日本人であれば漢字の書き取りは問題ないでしょう！」と、たまにクラスメートから言われることがあります。しかし、日本語と中国語のどちらかにもみ存在するものや、意味は同じでも微妙に書き方が違うもの（抜と抜など）が多く、日本人学習者はかえって注意が必要だと思いました。

また、先日から中国文化に関する授業が始まりました。私が参加したのは书法（書道）と手工（編み物）のクラスです。書道のクラスでは、お手本を参考にしながら中国語の成語を一人一人が書いてみるというものでした。始めてみると想像以上に熱中してしまい、あっという間に時間が過ぎました。埼玉で毎年行われていた硬筆展や書初め展のことを思い出し、不思議とどこか懐かしい気持ちになります。編み物のクラスでは、中国のミサンガのようなものを作りました。シンプルに見える編み物でも、自分で編んでみると意外と難しく、苦戦してしまいました。

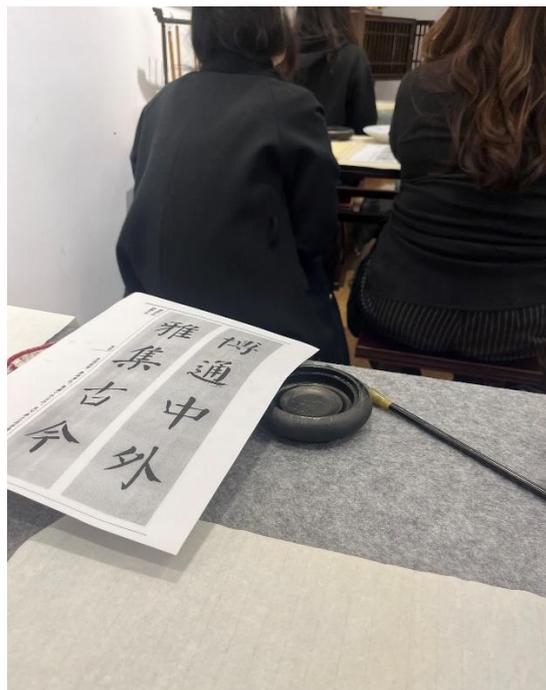
また、10月上旬頃に外国語学院で日本語を専攻している大学院生たちとの交流がありました。授業にお邪魔し、現地の学生一人一人に故郷を紹介していただきました。山西省出身の学生だけでなく、四川省や山東省で生まれ育った学生から、各地域の観光名所や歴史を教えてもらい、とても勉強になりました。その中で特に印象的だったのが、「千年の文明を見たいなら北京を、五千年の文明を見たいなら山西を訪れるべきだ」という言葉です。山西省は“煤老板（石炭の大ボス）”とも称され、中国文明が発展するうえで非常に重要な基盤を担ってきた地域だということを表しています。私が今いる山西省が、この広大な中国を形成してきた心臓のような存在だとは思ってもいなかったため、とても驚きました。

その後、私も日本にいた頃の大学生活や、埼玉県での暮らしについて少し紹介しました。日本の大学の授業の様子や授業外の過ごし方など、中国と異なる部分も多く、現地の学生たちは興味津々に質問をしてくれました。この交流を通じて、山西省と埼玉県には意外と共通する部分があるのではないかと気づきました。山西省は確かに北京や上海のような超大都市ではありません。同様に埼玉も、世界中の誰もが思い浮かべる東京とは少し異なるかもしれません。しかし、どちらも国の歴史や経済の重要な基盤を担ってきたことは確かであり、現在の両国の

姿を形成するうえで欠かせない存在であったことを再認識しました。

今月も最後までお読みいただきありがとうございました。今回お話しできなかった中国での食生活や大学の施設などは、今後のレポートでご紹介したいと思います。それでは、下个月見！

〈書道のクラス〉



〈編み物のクラス〉

